

大からくり絵巻



竹田からくり芝居の演目
現代語版
からくりフロンティア 末松良一 編修

東西東西、これから皆様へ申し上げるのは竹田近
江大掾の細工でございます

去年七月上旬からお目にかけました所 殊の外
御ひいきを賜り 早朝からお出かけ下さいまして
誠に有り難く存じ申し上げます

一座全員 恐悦至極に存じて
おります

さて 年内も引き続き
上演致しますので

御評判御ひいきの程
宜しくお願い
申し上げます

さらに引き続き 来る正月十三日から
新しいからくりを数多く取り入れて上演致します
どのようなものかをじっくりご覧下さい
これより 新からくりの絵尽くしの始まりで

ございます



鳥かぶり

練報泰平樂

からくりの
最初に上演します

ご覧に入れますのは、かんこたいへいらくと申します細工でございます

鳥おどろき太平の
御代を祝しまして、



太鼓の
中を改め
お目に
かけます

かんこどり深伏して
鶏に時を打たせるからくり
さて又、太鼓の肉より自ずから打ます
まず最初は、大坂表神事の太鼓を打たせ、
次に、芝居の櫓太鼓の肉と外と打ち分けます細工

何のとばしもございません

かき
り

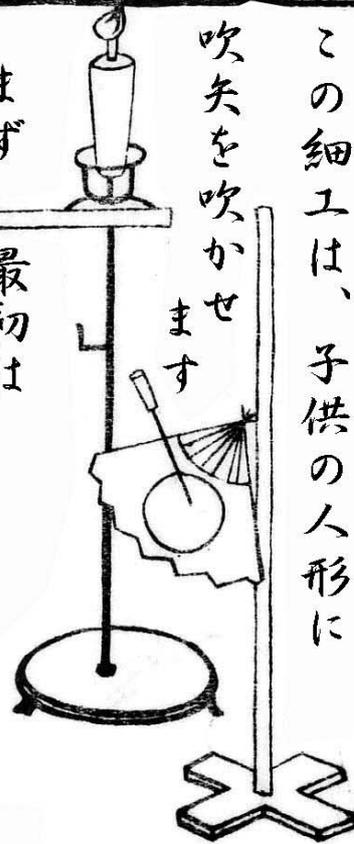
吹矢的まみり扇

このからくり
四ツ前に上演

この細工は、子供の人形に

吹矢を吹かせ

ます



まず
扇を

最初は
吹き落します

筒を
覗いて

狙いを

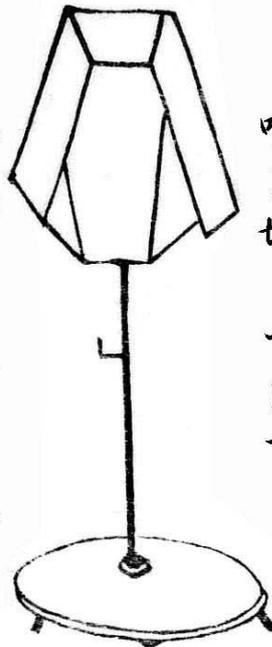
つけます



次に

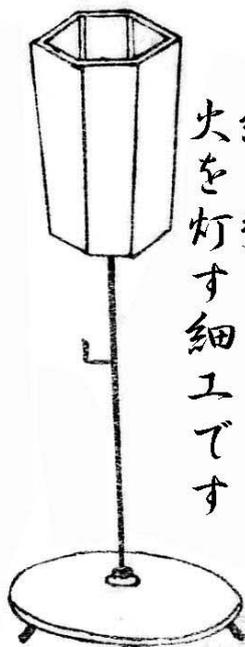
燭の芯を

吹き切らせます



さて、燭台の竿の中から
朝顔の骨組みが現れます

紙を張り
火を灯す細工です



ちよっとした見物です
少しも違わず演じます

お
り
天王寺番匠尊像

このからくり
昼時に上演

この細工は天王寺
大工の手斧から
始ります 次に

道具箱の
中から大工
道具が
出て
きて

聖徳
太子
の木像に
変身する
からくり
でございませ
四人の大工はそれぞ
れ動きますので注意してご覧下さい



墨を打ち
差金を当て
手斧を
使う

四人の
大工は
四天王に変わります



か
り
生玉燈口万歳

このからくりは
九つ前より上演

この細工は大坂いくだまの万歳



をうたいまぬけ踊りをおどるからくりでございませす



年若の付け声
竹田善吉
ささらをする
手使い



太夫の
付け声
竹田ふく蔵
四つ竹を鳴らす
手つき

です

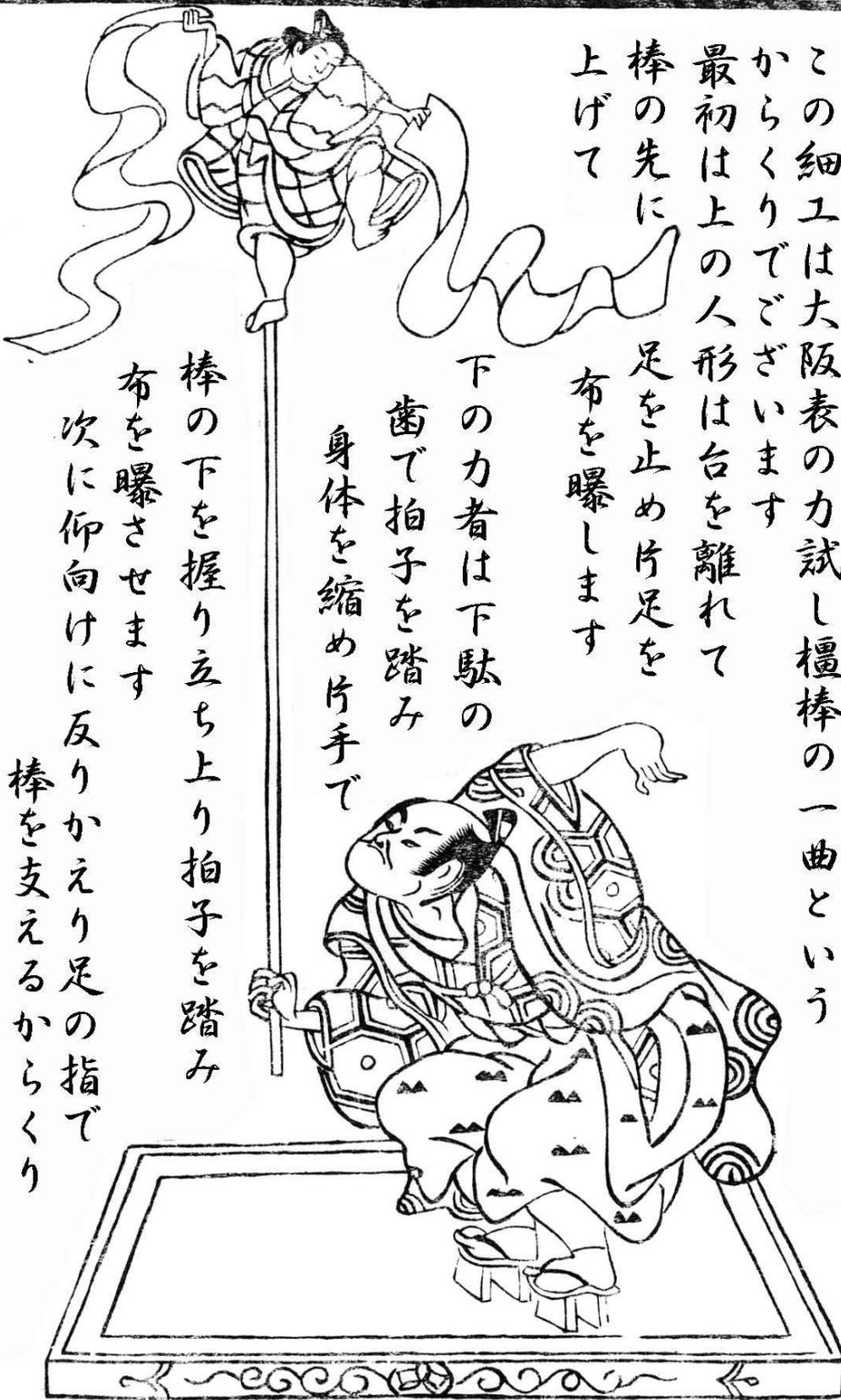
飛かろり 曲瀑浪花界

日付に任

この細工は大坂表の力試し檀棒の一曲という
 からくりでございませす
 最初は上の人形は台を離れて
 棒の先に
 足を止め片足を
 上げて
 布を曝します

下の力者は下駄の
 歯で拍子を踏み
 身体を縮め片手で

棒の下を握り立ち上り拍子を踏み
 布を曝させませす
 次に仰向けに反りかえり足の指で
 棒を支えるからくり



かり

おとぎかいらいし 内仰傀儡作

昼時に上演

この細工は、西宮の木偶の坊回しでございます。

最初は
唐子の
人形を

使

だんだんに
折畳みまして
舟弁慶を演じます。
また元のように畳返して
山猫が現れ自ら向こうへ

飛び移るといふからくり



仕合を
もって
今回も
演じます

つり
鐘

鐘入り
道成

日時仕

これは
この国のどこかに住む白拍子でございます



犯した罪も
消えるように

鐘の供養に舞らう



子供狂言に
引き続き
鐘入りの場面を
細工に入れ演じ
すま





二人の子供が釣鐘を持出して桜の梢に
引出して鐘の内を開き 中を改めて
ご覧いただきませすさて 白拍子は
能謡に合わせて乱拍子を踏みます
人々が寝入る時 釣鐘を担ぎ上げ
祈る時 釣鐘の中から現れ

撞木に取り付き鐘
を突きます
こちらの柳に寄
りかかり

拍子を
踏みます
全部離れ技
です

飛ば
一つも
さず演じ
ます

三味の付け声
謡 竹田九三助
能謡付け声
竹田伴三郎

おつ
とめ
しま
す

新編かきり

新編八挺鉦

このからくり
八つ時に上演

この細工は小夜の

中山八挺鉦

念仏の文句に合せ

三味

線

に

連れ

て

ハ挺

鉦でいろ

いの音を

打ち

分ける

からくり

でござい

ます

一つも飛ばさず演じます



ちやんから

てんから

ちんちん

少し速打す

鉦は最初に

手許へ上がり

次に

撞木を

構えます

こちらから

謡いかけます



か
り

舞伎曲馬音始

はいりようきよくばののりぞめ

このからくり
八時半時に上演

この細工
は

最初は
まず
輪乗りを
乗り回し
次に籠を
抜けて
向こうの
撞木へ
手をかけ

足を離し

馬を
乗り捨てるからくり

次に撞木を
千しを馬に
乗り移る
離し
見立て

樂屋へ
走り込み
ます

下の犬は生き物で
上は人形わざですから
何度、演じても
失敗しがちで
ございます



か
り

松返居合一手

日附之仕

この細工は
お目通り願う
ものではござ
いません
が
さして
ほどの

ご覧のように積み重ねました
枕の上に下駄をはき片足を上げ
脇を固め居合いを抜きながら
枕を一つずつ蹴散らしていくからくり
離れ業ですが失敗することはありません



失敗
した
時は
御容赦
下さい
エ
ヤ
ト
ウ

か
り

ふくじゆそう えがおのはるあそび
福寿喜笑劇

このからくり
七つ前に上演

この細工は下の唐子がだんだんに重なって

上の唐子は
肩を

離れ

吊り下

がっている房に

足を掛け

逆さに反返り

太鼓を打ちます

さて、布袋も立上がり

腹をへこへこ動かし

太鼓を打ち

拍子をあわせ

演ずるからくり



蘇からり
胎内十月分たいたいとつきのづ

このからくり
七つ時に上演

この細工は60年以前
元祖竹田
近江が
演じたからくりで
ございませす

最初はまづ
子種が降りて
子宮に入り
初月は錫杖の形で

不動明王が受取り
臨月は阿弥陀如来が
受取る所まで
毎月毎月の形を
表しますからくり
五ヶ月目から
手足が現れます



かろ 萬歳雅大か

この所 七つ時に
演じ申し上げます

この細工は、
前からくりとして
ご覧に入れます。

東西の男子が
三才になって、
知恵がついていく
からくり



ピーピー
笛を吹きます
湯浴み震いか
尿意を催したようです

これ、坊上年はいくつか
おお三つか、兄はどこか
お尻はどこか
この笛を
やろうか

前を捲り上げて
オシッコをします
残り惜しませず
シイリシイリ



この細工は

はや十才になり腕白もの殊に力もちで十二段のはしごの上に乗いた年位の子供を登らせ、はしごを押し上げるからくり。

上は子供です。下の人形に殊の外、力を入れるようにしました。さて、上の子供は、蜘蛛手の上で軽業をご覧に入れます。

最初は蜘蛛舞を演じ、次に下がり藤一本松采配を振り立てはしごにふるいを付けます。はしごをだんだんに前へ押し倒します。



大か
らり三筆松梅櫻

このからくり
四つ刻に上演

さてこの度の
からくりは、
三筆まつうめ
さくらと
申しまして
天満宮の人形
でございます
お目にか
け

三枚の梓へ
左右の手と口
によつて
右の三字を
すらすら
書き
ます

終わりに
唐子の人形
網渡りを
演じます

上出来



かろ

天儀神和合書始

日付と任

この細工は天神の
人形に左右の手

口筆よって

梅桜松の
三字を書

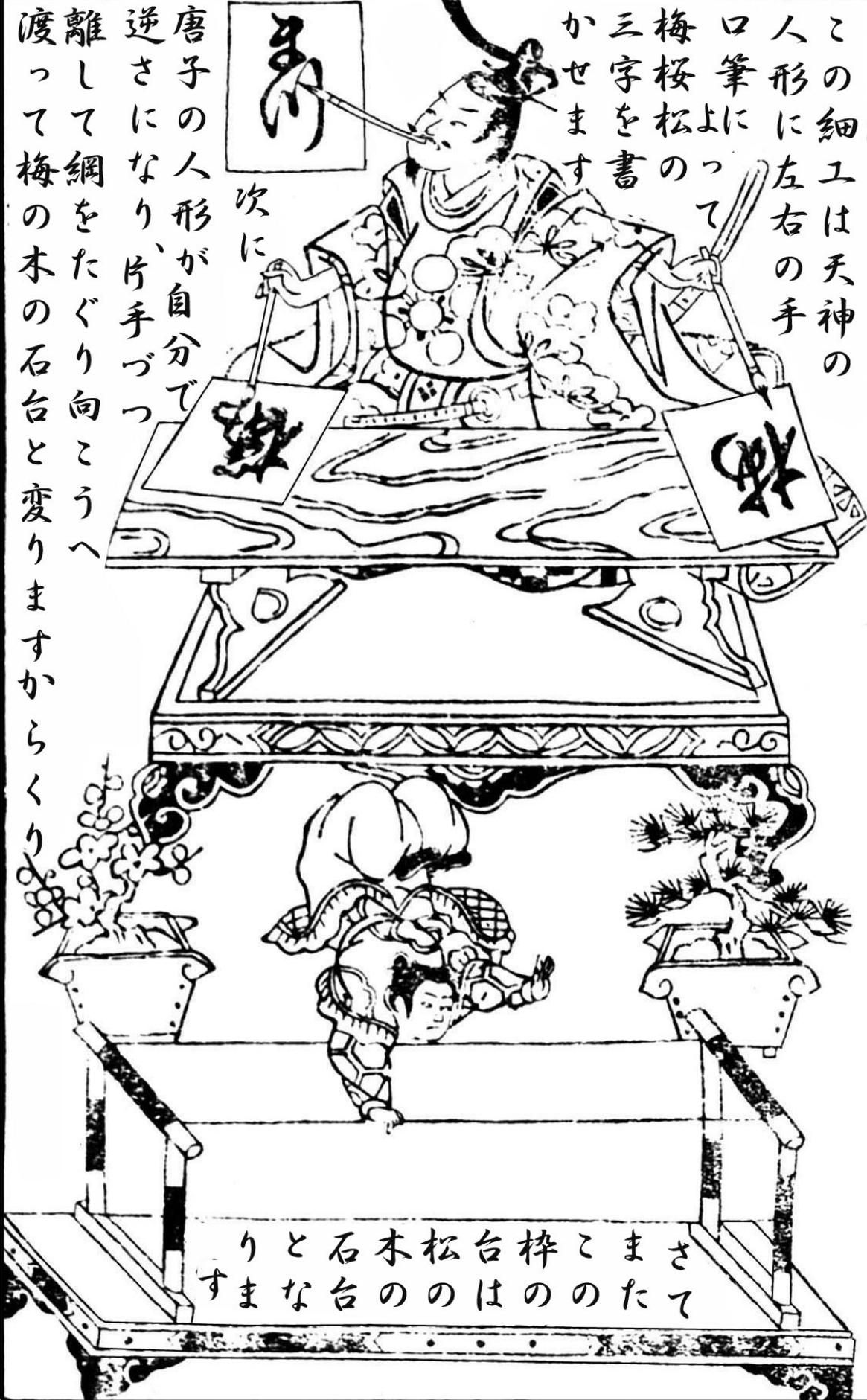
かせます

あ

次に

唐子の人形が自分で
逆さになり片手づつ

離して綱をたぐり向こうへ
渡って梅の木石台と変りますからくり



りとは石木松台梓こまた
すまな台ののはののたて

おそろ七化追分姿

ななばけ

おいわけ

すがた

このからくり
七つ刻に上演

ご覧に入れますのは、大津絵の七変化でございませう



まず最初は
藤の花を持つ人形が
歌三味
合わせ
動き
ます

次に
鬼の念仏
と変わり



次は 若衆の
枕返し
次に福荷座頭となります



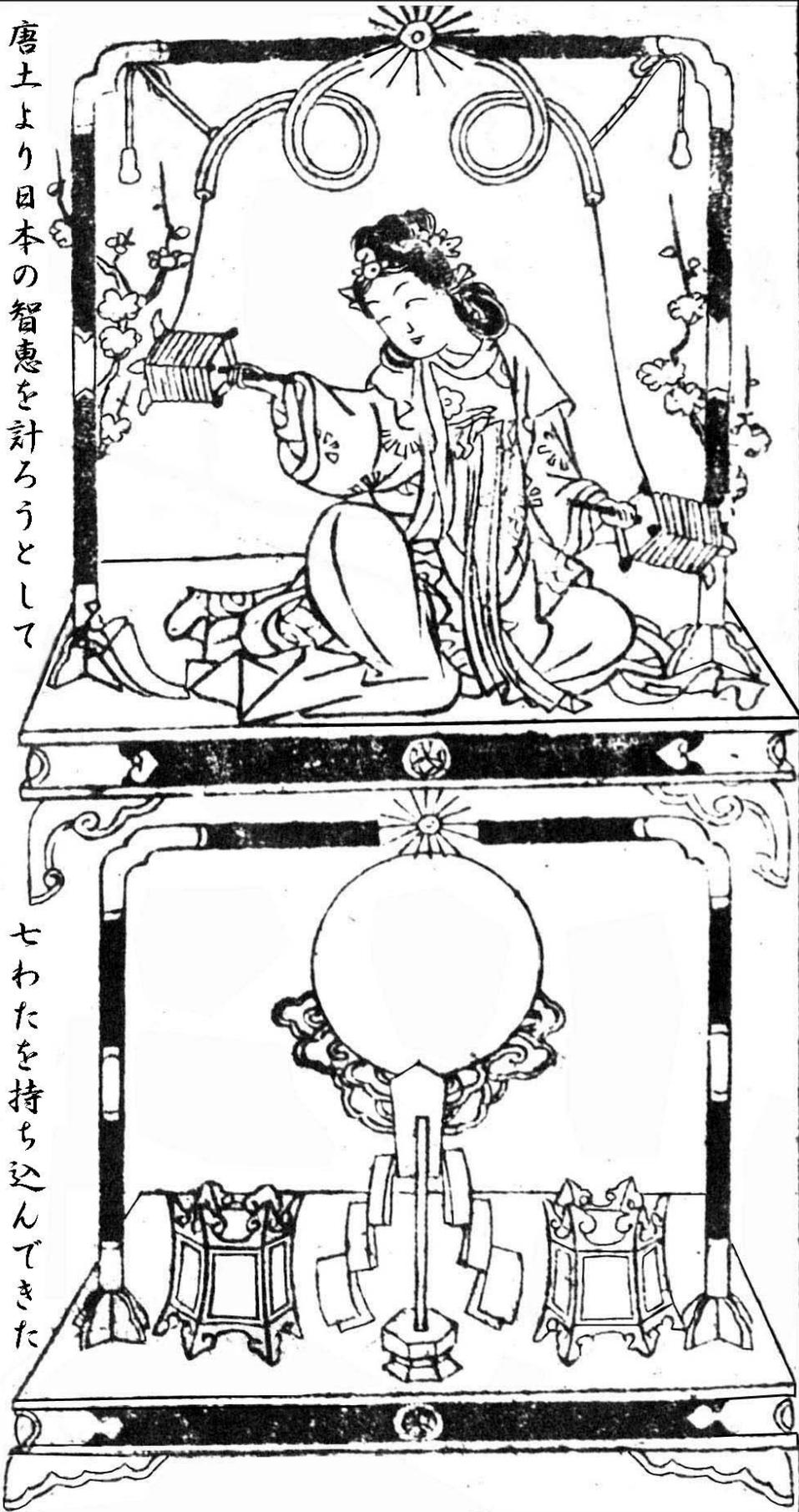
えいえいよう
手わざで
籠ぬける



一つの人形いろいろに変わるからくり

前かぐり七曲神秘糸

けかぐり
正四つ時仕



唐土より日本の智恵を計らうとして
 のでございます その一方へ蜜を塗って蟻に糸を付けて通させる細工でございます
 あちらからこちらへ糸を巻取ります さてこの人形は神鏡に変身します
 七わた蟻通しの秘技とともに梓に紙をはり灯明を灯します

かぐり

